

第3回衛研シンポジウム開催 Rev1.7

「化学物質の安全を科学する」— リスク評価の新たな流れ —

広報担当 宮原 誠

7月26日(金曜日)、東京世田谷の国立衛研の講堂にて、恒例となった第3回衛研シンポジウムが開催された。会場の講堂には約120席が用意されたが、食品安全委員会関係者、医薬基盤研究所、農林水産省消費・安全局などの政府機関関係者、日本生活協同組合などの医薬品・化粧品・食品関係者、東衛会関係者及び本所職員でほぼ満席となった。奥田晴宏副所長による開会の挨拶の後、生物安全試験研究センター各部の講師による最近の安全性試験関係の話題6件(下表)について、講演が行われた。最後に川西徹所長の閉会の辞が述べられ、第3回衛研シンポジウムは閉会した。

この日は薄曇りで、日中の最高気温 29度と若干しのぎやすく、多数の方々に参加して頂けた。奥田晴宏副所長は冒頭の挨拶で、衛研の歴史を振り返った後、“外部機関評価で、国立衛研は良くやっているようだが、何をやっているのか分かりにくいとの意見があったので、本会では専門家向けにその活動を紹介することにした。このシンポジウムを通じて、衛研への理解を深め、これからの衛研を支えて頂きたい”と本シンポジウムへの期待を示した。

本間正充変異遺伝部長の司会で講演が開始され、後半から西川秋佳安全性生物試験研究センター長の司会で午後5時40分過ぎまで講演が行われた。遺伝毒性と発癌性試験関係の講演に関連し、“発癌試験としては、講演で示された内のどの試験を行えばよいか?”、“血液系のiPS細胞の造腫瘍性はどのように試験するのか?”、iPS細胞を利用した毒性試験に関連し“iPS細胞由来心筋細胞を使った心毒性試験を行う場合、細胞ロット間の特性の違いによって問題は

起きないのか?”など、最先端の安全性評価法に関する質問が相次いだ。

川西徹所長は閉会挨拶で、“毒性学は、ヒトに対する安全性評価の予測性向上に向けた革新の時代にあり、チャレンジングなテーマに満ちている。”と本会を総括し、“衛研シンポは過去に医薬品、食品、そして今回は安全性評価試験をテーマとした講演会を実施した。来年も引き続き実施したい”と締めくくった。

表 2013年衛研シンポジウムの演題一覧

- 1 安全性試験の現状と課題
安全性生物試験研究センター長 西川 秋佳
- 2 毒性の定量的網羅的解析・評価 —Percellome Projectの進捗—
毒性部長 菅野 純
- 3 ヒトiPS細胞の安全性試験法への応用
薬理部長 関野 祐子
- 4 げっ歯類を用いたがん原性試験の将来像
病理部長 小川 久美子
- 5 遺伝毒性の予測とリスク評価
変異遺伝部長 本間 正充
- 6 リスク評価における不確実係数の表現法
総合評価研究室長 広瀬 明

<http://www.nihs.go.jp/oshirasejoho/symposium/>に当日資料を掲載。